

---

Wandering Trip

# 私と彼で行く放課後小旅行

瀬々

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Wandering Trip 私と彼で行く放課後小旅行

### 【Zコード】

N8227X

### 【作者名】

瀬々

### 【あらすじ】

文武両道、容姿端麗な幼馴染に放課後の教室で告白された。「俺勇者の生まれ変わりダカラーッ」とだけ? まかの痛い人力ミングアウトに睡然としていたら、いつの間にか一人して異世界へ召喚され彼は勇者、私はその従者になっていた。つておいおい、旅の仲間は女ばっかりかよ、なにこのハーレム。私の肩身がせまいよ! これは異世界に召喚された私と心配でついてきちゃった元勇者の、まったく手に汗握らないかもしない物語である。 11/12/09 タイトルを少し変更

## 1、右腕に宿る邪神曰く。

「聞いてほしい、ことがあるんだ」

傾きかけの夕焼けに染まる教室で、彼がそう言ったとき、私はわかる人にしかわからないネタを散りばめつつ当番の学級日誌を渾身の出来に仕上げていたところだった。

いつものように一人で帰ろうと前の席に座つて待っていた彼が、唐突に、どこか苦しそうな様子で話し出す。

開けたままの窓、スピーカーからかすかに流れてくる、下校を促す放送にせかされて、私はなかば聞き流すよつにして作業を続けていた。

一人だけの静かな空間にシャーペンの音だけが響く。沈黙が拒絶ではないのはどちらもわかつていて、生まれたときからの付き合いは伊達ではない。

なかなか続きを口にしない彼を怪訝に思い、手を止めて顔を上げる。

目があつた。

「俺さ、実は…………生まれてぐる前に異世界で勇者やつてたんだ」

時が止まった気がした。

フリーズののち再起動するも状態異常：混乱。

えーと冗談？ あまりおもしろくないけど。でも思いつきり真顔だな。あれ？ 目がマジだよこの人。あれ、私の幼馴染つて実は凄い痛い厨二病的な人だつたのか。というかこの場合なんて反応返すのが正解？ 笑つて合わせるべきか現実を諭すべきか、いやでももしこの衝撃の告白が彼のなけなしの勇気を振り絞つてなされた、一週間以上の精神的準備期間を経た上での彼なりのいぎよふ、噛んだ、

偉業なのだつたりしたら、ここは付き合ひの長い幼馴染である私は  
その蛮勇をそつと汲み取りそして讃えるべきなのではないだろうか。  
例えそれが蛮勇でも。

などとくだらない問題解決法が脳内でぐるぐるする。  
とりあえず私は

「そ、そらなんだ」

と無難に流すことしかできなかつた。どもつたのは愛嬌といふことで。

なんともリアクションできない私に、彼は柔らかく笑つて続ける。

「俺が小さい頃、超能力使えたのは覚えてる?」

問い合わせられて記憶を探るが覚えがない。  
眉根を寄せた私に、今度は苦笑しながら。

「火を起こしたら親に火遊びだつて言いつけられるし、風を起こしたら人間扇風機とか言われるしで、僕結構ショックだつたんだけど」

そんなこと言われても覚えてないものは覚えてないので、それがどうしたと田を細めた。

「それ、魔法。前世から能力を引き継いだつぽいんだよね  
「……だから、それがどうした」

笑つてばかりで進まない会話の内容に少し苛々してきた。

ただ厨二の暴露がしたかつただけなら邪魔をしないで欲しい。なぜ長年隠してきた秘密を今日この日に伝えてきたのかは知らないが、きっと右手に宿る邪神のお告げでも聞いたのだろう。今日は大安吉

田だＺＥ、とか。

そんな邪神とは全く縁のない私は、速く田誌を終わらせて家に帰り水戸黄門を見る。これは決定事項であり誰にも邪魔はさせぬ。語尾がおかしいのは決意の証。

「うん、それでさ、そっちの世界に君が喰ばれてるんだけど心配だからついてくね」

「……は？」

続けられた予想外な台詞にあっけに取られて、私たち周辺の床が光りだした。

「そろそろ抑えられなくなってきたんだよね。大丈夫、だいたい俺がなんとかするから」

「いやいや、は？」

光がどんどん強くなつていき、疑問よりも眩しさに田をつむつてしまつ。

そうして、私だけがよくわからないままに私たちはこの世界からフェードアウトしたのだった。

光が収まつた後の教室、残された田誌には走り書きで書きかけの文字。

『だれか今日の水戸黄』

光が消える間際までそれを書いていたシャーペンは、持ち主と共に姿を消していた。

## 2、耳をすませばほり

光はしばらくして収まつたが、眩んだ私の目はすぐに機能回復とはいかなかつた。

どうやら辺りは薄暗いようで、それが余計に目を馴れさせなくさせる。

ぱしづしする田を擦り、何度もまばたきをした。

なんとか視界が落ち着いてきたところであたりを伺うと、田の前に幼なじみの背中。えつと……さつきまで貴方にじつに向つてしまつたつけ。

状況のつかめない背後の私を完全スルーして彼が低い声で囁つ。

「つまり、魔王を倒せば帰れると？」

なんのはなしだ。

ありがちなRPGみたいな話をしていた。正直ついてけない。あつ私一般人なん……といつ心境ではたと氣付く。この人誰と会話してるんだ。

座つたままだつた姿勢をそつと倒し、彼の横から正面を覗く。やたら白いひらひら衣装を着た、超絶美少女がそこにいた。うわあお眼福。

肌は白く、髪も白く、目はじく薄い水色。触れれば折れてしまいそうな華奢な体だが、瞳の光は強くしつかりとした芯を感じさせる美少女。それが、幼なじみの前でひざまづいていた。なぜ。

「召喚の魔法陣を通過した時点で、そのような契約となつてあります」

超絶美少女な彼女は明らかに日本人でない見た目にも関わらず、

幼なじみの田をしつかりと見つめ流暢な日本語でそう答えた。

「もし魔王が他人に討ち取られたり、病に倒れた場合はどうなる」

田の前の彼がやはり低い声で続ける。なにやら機嫌が悪いようで、自分に向けられた質問ではないのに怖い。でも病氣に負ける魔王はないと思うな。

「魔王さえ倒れれば、契約は成されたと見なされます  
「用が終わったらさつさと帰れということか」

辛辣な切り返しに、ホワイト美少女さん（仮名）の表情が悲しげにくまる。

「リサクィアスフの勇者様には全く関係のないことと存じてあげております。しかしどうか、滅び行く私たちを哀れに思い、その御力を貸して頂けないでしょ？」

そう言って、彼女は私たちに向かつて頭を垂れた。

そのリサなんとかって何？ とか聞きたいけどそんな空氣じゃないくらいはさすがに読める。

重い空氣になんとなく汗をかきつつ、ホワイトさんが下げた頭の向こうを見てようやくここが石造りの部屋であるのを知った。

ホワイトさんの声がよく通つて聞こえるのは反響してるのかな、なんて狭い視界で部屋を見回す。辺りが暗いのでよくわからないが壁際に何人かのシルエットが見えた。

影は何かをこつそり話し合つているようで、自慢の地獄耳を澄ませても距離があるため詳しい内容がわからない。  
かすかに聞こえる言葉の断片を頑張つて拾つてみる。

「パツパツパー」 「パパパラピペルピ

……………舌噛まないんですか？

しばらくの間、私はパ行に侵略された謎の言語を必死に聞き取ろうとしていた。

未習得の他言語を聞き取るなんて私には無理だつたんだ……と、さすがに遠い田で諦念の抱いたこと、ふいに手を握られる。いきなりでちょっとビビった。

見れば彼が優しげに微笑んでいて、いつの間にかホワイトさんとの話はまとまつたらしい。

「大丈夫、一緒に行くよ

何が大丈夫なのかは知らないが、彼が一步踏み出したのを見て私も慌てて後に続く。

立ち上がって足を出した直後、薄氷が割れたような音がした。

「？」

なんだろうと辺りを見まわす。

あ、と今更気付いたが足下には小さい魔法陣？ のようなものが

あつて、うすぼんやりと輝いていた。私はちょいとその縁に立つていて、これが部屋の光源になっていたのだと納得。でも音には関係なさそう。

立ち止まつた私を不安にかられていると思ったのか、今一度声をかけられる。

「大丈夫だよ」

手を引かれて、今度はそのまま陣を出た。

とたんに感じる肌寒さに、やはりあれは魔法陣か何かだったのだろうかと考へる。陣の外は底冷えした空氣で満たされていた。

ホワイトさんに先導されて部屋を出ると、振り返った先で魔法陣の光が序序に消えていくのが見えた。

通路はそれ自体が淡く発光しているようで真っ暗闇にはならないのだが、それでも段々と見えなくなつていく視界の中。

気付かずに握り返した手は変わらず暖かかった。

## 2、耳をすませばほら（後書き）

耳をすませばほら、謎言語。

現実逃避してて話を全く聞いていなかつた主人公。

### 3、一人きりの夜、そして引かれる腕、痛む頭

「どうやら私たちが召喚されたのは真夜中であつたらしく、薄暗い部屋を抜けたあとは密室っぽいところに通された。

仮にも年頃の男女、当然のごとく別の部屋になるかとも思ったが召喚されるのは通常一人なので使える部屋は一つしかないらしい。ホワイトさんがたどたどしい日本語で説明してくれた。さつきの流暢な会話は、実はこいつそり練習済みだったとかなんだろうか。一人で「ゆうさ、えつと勇者、わま、」とかどもりながら練習したんだろうか何それ可愛い。

ホワイトさんはとても申し訳なさそうにしてくれているが、言つてることはもつともで、そりやそうだわなと声に出さずに納得する。急いで用意されたと思しきブランケットがあるだけでも、充分だと思わなくては。

パルプンテ、とホワイトさんは言つて部屋から出て行つた。一瞬ビクつく私。なぜ今その呪文。

扉が閉まり、若干の静寂をはさんだ後口を開けたが、私よりも彼の言葉の方が速かつた。

「明日、ちゃんと説明するからさ」

予想外に疲労している聲音に驚いた。真後ろにいたのにまったく聞いていなかつたが、ホワイトさんとの会話はそんなに壮絶なものだつたのだろうか。

「だから、今日はもうちょっと休みたいかも

休もう、ではなく休みたいと言つた彼に私は無言で賛同する。どうか私に許可とらなくても勝手に休めばいいのでは。って、おい。

「ああやすみ、と書いて当たり前のみソファへ近づく彼の腕を掴む。

「……え

「……え、ってなんだ。」

疲れたんだねえ、そういえばすと田を丸くして、そのあと少し赤くなつた。

「おー、書いておくが一緒に寝るとかはないからな

そう告げると今度はまつるやくなる。

女の子なんだからとか、うんたらかんたら。

文句は総スルーでベッドまで引きずつていぐ。重い。

目標地点に到達したあたりでみぞおちに一撃入れようとしたが避けられた。

チツ。

「ちよ、待つてわかつたから、ストップストップ！」

なおもしつこく急所を狙つていると、ようやく彼が折れる。

「わかつたからー。俺がベッド使うからーー。」

よつしゃ言質取つた。

しぶしぶといつもうに彼がベッドに入るのを見届けて、私もソファに横になる。ブランケットも、一枚だけだが良いものなのか暖かいし、クッショングもふつかふかで寝心地は以外と快適。ゆづくと目を閉じて、やがて眠りについた。

翌朝起きたら自分はベッドで、彼はソファーで寝ていた。なにか負けた気分だ。

「…………はよー」

起き抜けの髪を手櫛でとかしながら声をかける。

「起きるー」

返事がないので近寄つてみると、寝てる。ゆでぶつてみると。

「おーい朝だぞー」

じぱりくわくわくしてみると、ほんやつと見開いた瞳と皿が合つた。

起きたのか、と立つ上がりすると腕をつかまれる。

「寝ぼけてんのか?…………つまわつ

腕をふりほどいた瞬間に強く引かれて、私はソファの方に倒れこんだ。彼のもう片方の手が自分の背中に回されるのを横目に

見つつ 一人してソファから転げ落ちる。少し遅れて、硬いものがぶつかるような鈍い音。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」めん

「……」

「いや、こきなり引っ張られてバランスとか普通とれないだろ」

「……」

「だから『めんつて……頭は大丈夫か？ テーブルの足に思いつきりぶつけてたが」

「……おはよ」

返ってきた声に、なぜだか罪悪感。悪いのは寝ぼけてた向こうなのには故だ。

立ち上がり立つとまた引き寄せられる。なんなんだと顔を見ると、まだ寝ぼけてるつて訳ではなさそうだが怪訝な表情。訳がわからないのはこっちなんですが。

「んー、まあ服にかけとくか」

そして自己完結。

「何を服にかけるつて？」

「とりあえずの保険だから、大したものじゃないよ」

よけいにわからん。

その後うだうだと二人して起き上がり、顔洗いたい……なんて思つていたらホワイトさんがやって来た。濡れた布を持って。ホワイトさんまじいい人。

### 3、一人きりの夜、そして引かれる腕、痛む頭（後書き）

パルブンテ・訳（「ひとりくりお休みください」）  
決して呪文ではなくただの挨拶である。

#### 4、目が合つた事実などなかつた

ほゞよく冷たい手拭いに喜んでいると、見たことのない腕輪を差し出された。

「なんだ？ その腕輪」

横から飛んできた彼の声と私の内心は綺麗にシンクロしていた。疑問を浮かべて彼女を見つめるも、逆に「一〇一〇」と見つめ返される。着けろつてことなのかな。

象牙っぽい質感の腕輪を左手に通してみる。

「その腕輪は魔道具の一種で、着けた者にかけられる補助魔法の効果を増幅してくれるんです」

紡がれたホワイトちゃんの説明は、昨夜と同じようになにか流暢だった。

「言葉……」

ふふ、と柔らかく微笑んで彼女は右手を掲げる。細い手首には、これまた細い銀の一連ブレスレットが。内側の青い装飾がチラリズムで綺麗。

「実はこれは『疎通の双環』という魔道具で、使用者と会話する相手双方の内心を読みとつて翻訳してくれるものなのですが、昨日はこれを着けていたにも関わらずあまりうまく会話できなくて」

あーたどたどしかつたね、と思い出す。

「歴代の勇者の中には魔法が効きづらいう体質の方もいましたし、きっと今回もそうなのだろうと思います。言葉が通じないままでは不便なので、そちらの補助魔法を増幅する腕輪をお持ちしました」

なるほど、そう繋がつてくるのか。

白い腕輪の表面をなでるとわずかな凹凸があることに気付く。彫りこまれた模様が年月と共に磨り減ったのだろうか、すじにアンティーク品を貰つてしまつた。

彼も見たことがないものなのかな、二人してまじまじと白い腕輪を眺める。

そんな私たちを見てホワイトさんもふわりと微笑し、続けた。

「それから、本日の予定ですが、朝食のあとお召し替えしていただき、その後陛下と謁見になつています。現状の詳しい説明も、その場でさせていただきます」

「わかった」

彼が簡潔に答え、ホワイトさんは退出していく。

ご飯を食べる前には着替えないのかと思つていたら、そのうち部屋に料理が運ばれてきた。なるほどここで食べるのね。

料理はおおむね普通のものだつた。おおむね、といつ言葉通りに時たま青かつたり動いてたり目が合つたりするのが紛れていたが。そういうのは手をつけずに入ルーする。うん。私は何も見ていない。だから謎の物体Xと目が合つたりもしていない。うん。

さて次はお着替えか、と考えたところでふいに左手を取られた。

いや、正確にいうなら左手の腕輪を。

### 「ただの保険の保険」

起きた時と同じように笑つた彼に疑問を抱くのも疲れてきてスルーしてやる。もういいよ、思わせぶりたい年頃なのよねハイハイ私は昨日から頭がパンクしそうだよ。

完璧に無視された形になつた彼が視界の片隅で拗ねてるのを気付かないフリでやりすげじつつ、案内にきたメイドさんの後について行く。

謁見という言葉のイメージに、スカートの下にフレームが付いてるドレスとかでなければいいなあ、なんて遠い目をして。

結論、ドレスはフレーム付きではありませんでした。そもそもドレスというか普通の白いワンピースでした。それでも充分レースやらフリルやら付いてましたけども。

ちなみに我が幼馴染とは着替えた後に合流したんだが真剣に吹き出しそうになつた。一番近い服を上げるなら白い学ラン。通称白ランと呼ばれるアレ。それにちょいちょい金具のついた組み紐とかピンとかが付いてる。でもベースは白ラン。正直コスプレにしか見えない。決して似合わない訳ではなく、むしろ「顔がいいってお得」が納得なのが。でも、でもさ、似合つてるとからこそ笑いたくなる

ことつて、あると思つんだ。実際は笑わなかつたけど。頑張つて堪えたけど。

普通はだいぶ失礼な反応だがこれは失礼にはあたらない。なぜなら向こうも笑いを堪えていたのを知つてゐるからだ。

隠してゐみたいだつたが、何年幼馴染をやつてると思つてゐるんだ。口元ちょっとにやけてんぞ。どうせ避暑地のお嬢様風白ワンピなんて、私にはレベルが高すぎたんだ。ちくせう。

「ひかりが謁見の間になります」

ホワイトさんから声がかけられ、大きな扉の前で立ち止まる。

彼を見るときさすがに緊張しているのか、わきまどにやにや顔とは一変して顔をこわばらせていた。

立ちつくす私たちの前で、ゆっくりと扉が開いていく。

謁見が、始まる。

## 5、謁見（前書き）

極短。

## 5、謁見

謁見終わりましたー。

え、内容？ 凜々しい表情で話す我が幼馴染の横でぼけっと突つ立つてましたが何か。正直自分いなくともいいよね！ とも思ったりしましたが何か。

だつてだつて、座つてた王様っぽい人に清々しいほどシカトされたりですよ私。もしかしたら皇帝かもしれないけどこここの政治形態なんて知らないので王様つてことにしておく。ちなみにワイルドな風体のおじさまでした。

ともかくも私たちは緊張を隠せないまま部屋に入り、大人しく進んで王様に声をかけられ、意気込みさあ始めるぞと思つて、そしてスタートしたのは隣の彼と王様とのマンツーマン個人面接。二人の関係に私の入る隙間なぞなかつた。そのままの意味で見向きもされないとは。ここまでスルーされて会話に横やり入れるなんて出来ない意気地無しな私を、笑いたければ笑えばいい。でもきっと日本人ならわかるはず。その場の空気が私にささやいていたんだ、オレを読めと。

結局そのまま謁見終了までいきました。

いつの間にか私おまけ、彼勇者なポジショニング。明言はされなかつたけど、私日本人だもの空氣読めるもの。というかもし私が勇者であるとしたら、もうちょっと発言権があると思うんだよね。自分で考えて悲しいけど

ん、でもあれ？

喚び出されたのはそもそも私なんじゃなかつたつけ。

「そことのところ実際はどうなの？」

「これなりすまむ反応できないんだけど」

謁見の後、戻ってきた密室で言つたらそう返された。

実は独り言で、返事があるとは思つてなかつたからひよつとビビつた、なんて秘密だ。

言つておくがこれは自分のためではなく、彼を独り言に返事してしまつよつた恥ずかしい人にしてはいけないと思つたからだ。私なんて優しいの。それはともかく。

「ええと、勇者って結局どっちなのかと思つて」

曰 惑いを誤魔化すよつて説明する。

「勇者なら俺がやるよ?」

「いや、そうじゃなくつて喚ばれる前につておおいー。」

私が喚ばれるとかつて言つてなかつたけ、といつ質問は飛来したクッショーンによつて阻まれた。とつてにはたき落せた私は「じこといつそり自画自贊。

「こつたいて何?..」

まやかの身内からの襲撃に一瞬跳ねた心臓を抑えつつ聞けば、まぐにつつかりと言つた風で。

「「めん、とつをだつたからつ」」

何が、とつを、で、ついて、でクッショーンを投げる必要せどこにこつたんだ。

彼は少し考へこむよつとした後、並のお嬢さんなら恋に落せるで

あらう笑顔を私に向ける。

「状況確認も兼ねて最初から復習しようか

そんな顔しても誤魔化されないぞ、といつ言葉は口に出さなかつたが胡乱なまなざしは向けておいた。

6、気になる人の人を狙い撃ち、もしくは届けこの思い（前書き）

主人公がやつと現状を認識。いつもより会話多し。

## 6、気になるあの人を狙い撃ち、もしくは届けの思い

昨夜から部屋に転がしたまま放置していたシャーペンを手に取る。紙がない、と部屋を見回せば横からメモ紙が差し出された。

「どにあつたの?」

「生徒手帳から破つた」

「持ち歩いてたのか……」

真面目に携帯してる人を初めて見た。ソファーに腰かけると彼も隣に腰を下ろす。

少し悩んで、『《謁見でわかつたこと・まとめ》』と書き出した。

「謁見つてこの字で合つたつけ」

「合つてるよ」

謁見の謁の字つて他に読み方とかあるのか? 関係ないことを考

えつつ続けて書く。

『 私たちは異世界に召喚された。』

「え、そこから書くの」

「一番最初のどにから確認するつて書いてただる」

言い出したのはそつちだるつにと返して、異世界、異世界ねえ、と言葉にならない程の咳きを口の中で転がす。薄々（うすうす）解つてたけど認めたくなかったこの大前提。外国に行つたことすら無い私なのに一足飛びで異世界とかどうじるというのだろうか。外国みたいに生水にあたつたりするのか。

「とりあえず魔王倒せば帰れると」

また書き込む。

『魔王ピチューーン 帰れる』

「ピチューーンって何?」

「効果音だ」

それからええっと。

『ZNの他力本願。自分たちでやれ。』

「おっと本音がつい」

違う違う、書こうとしたのは本音じゃなくて。

『私=おまけ認識されてい』

「ちょっと貸して」

隣からのびた手にシャーペンを奪い取られた。直前に書いた文字  
が消され、メモ紙に新しい字が追加される。

『俺=勇者、カナ=その従者』

「え、私って従者扱いだったの」

驚いて聞けば呆れたようなまなざしどぶつかった。

「謁見のときに元気ってたけど……」

言われてそつと手をそらす。

あれが、ワイルドおじさま風な王様の一人称が「朕」だったのを

笑いそうになつて、あれ、でも翻訳腕輪は着用者と会話の相手の内心を読み取つて訳すんだからつまり自分のイメージの方がおかしいのか、いやでも「朕」は皇帝だろ、なんて必死に考えてたときか。それ以降はちゃんと話聞いてたから。

しかし従者か。

「そもそも喚ばれたのは私じゃないの？」

私と彼で並べたときどちらが勇者に見えるかなんて解つてゐるが、見た目がどうこうとはまた別で。私が勇者として喚ばれたというなら、その役目をこなすのは私であるべきではないのか。そのためには喚ばれたのだから。

問えば予想していたのだろう。即座に答えが返される。

「二人とも陣を介して喚ばれたから、両方に資格があるんだよ」

そんなものなのか、と欣然としないでいるところに置み掛けられる。

「戦力的にも俺の方が強いし」

むぐ、確かに。

「気になるなら全力でサポートしてくれればいいから」

譲る気がない声音で重ねられる説得に、しぶしぶ私は折れた。

「……りょーかい」

「ん。じゃあ次だね」

了承すれば、話はもう終わりといつよつに彼は視線を落とし、私から奪つたままのシャーペンを紙に走らせた。

私の文字より綺麗な字で、

『 勇者の武器として聖剣を一振りと防具が与えられる。正直いらない』

と書きつける。

「いらないのかよ」

「だつて、ねえ」

ねえって言われても知らないんだが。

「えーとそれから」

『 討伐に出発する前に戦闘訓練と魔法の講義がある。』

ん?

「こなん言われたつけ」

謁見の記憶を探るが該当するものはなかつたよ。

「近いに力を見せてもひつかひてたでしょ」

あれつてそういう意味だつたのか。

「まあちよつと違つただけどね。同じ」とだよ

ふうん、と私はうなずいて流した。

戦闘訓練がもし自衛隊みたいな訓練だつたらついていく自信がない。

「んーあとは、」

『被召喚者は召喚された時に特殊な能力が2～3付加される。能力の内容は個々人で違う。』

『魔王討伐は勇者を含めた四人パーティで行われる。他メンバーの三人は後日紹介。』

一気に書かれた文字でメモ紙は埋められていく。その中のとある単語に私の目がひかれた。

「特殊な能力って何？」

「まあ待つて待つて」

メモの一一番下までサラサラと書き込んで彼は手を止める。

『次回講習会はこの世界の一般常識初級編、お楽しみに！』

「今説明役が来るからさ」

ちょうどタイミングよく、部屋の扉がノックされた。

特殊な能力か……できれば大陸間弾道ミサイルとか、呪いのような能力がいいなと私は思った。この場所から動かずに魔王倒せる能力プリーズ。

6、気になるあのを狙い撃ち、もしくは届けこの思い（後書き）

気になる人の人を（大陸間弾道ミサイルで）狙い撃ち、もしくは届けこの（呪いの「」とき）思い。

ところでやつと主人公の名前（ただし愛称）が出てきましたが、幼馴染な彼の名前はいつになつたら出てくるのだろう。

## 7、そんな能力で大丈夫か

扉を開けると、ホワイトさんがこぶしひだの水晶玉を持って立っていた。

鈍器にするには掴みにくそだなんて私は考えていない。

「謁見の直後でお疲れとは思いますが、先ほどお伝えした特殊能力について説明に参りました。」

言いつつも気遣うようなその表情に癒される。  
全然元気です、という意味を込めて笑顔を向けた。

「わざわざ君が来てくれたんだ」

彼が少し驚きながら部屋にホワイトさんを招き入れる。

「お一人を召喚したのは私ですから、最後まで責任をみるのは当然です。それで私のしたことを許していただけるとは思っていませんが……」

「優しいんだね」

薄く微笑みながら言った彼に、ほんのりと頬を染めるホワイトさん。そういえば顔の美醜はこちらでも共通なのだろうか。

「ホワ、えつと……、自分で望んでやつた訳じゃないんですよね？ 立場だつてあつただろうから、そんなに気にやまないで下さい」

おつと危ない危ない内心の呼び名を口にするといつだつた。ホワ

イトさんの名前ってなんていうんだろうか。今更聞けない。  
名前わかんないけど、あんまり気にしなくていいのに。だつても  
う過ぎてしまつたことだ。

「ありがとうございます」

そう言つた笑顔があまりにも綺麗だったから、ああそれでも「」の  
人は氣にしてしまうんだろうなとわかつた。

しんみりとした空氣を払拭するように、彼が明るい声を出す。

「それで、魔法とは違う特殊な能力を2、3だけ? その水晶で  
占つたりするの?」

からかうように聞かれ、クスクスと控えめに笑い出すホワイトさ  
ん。

「占つたりはしないですけど、この水晶玉で能力がわかるのは当た  
りです」

「それも魔道具か何かってこと?」

「はい」

座つて説明いたしましょとホワイトさんが言い、三人揃つてソ  
ファーセットに腰を下ろした。

「能力の判定をいたしますので、『鑑査の水晶』の上に手を置いて  
下さい」

差し出された水晶玉の上に彼が手を置き、ホワイトさんが詠唱ら  
しきものを始める。

「ペーリカ、ペコカラ、フムフムヌクヌク、アプアアー」

言い終わると同時にぼんやりと水晶が発光した。その光はかすかに熱を伴つてゐるようで、近くにいた私たちにもその温かさを伝えてきた。

しばらくして光が收ると、球体の中、その中心に何か模様のようなものが描かれていく。

「フレス祝福と、……セルフアップ自己強化」

彼の言葉によくよく見れば、妙にくねつてゐるが確かに日本語だつた。

文字は球体の中心に浮いてゐるので、真正面から見ないと全く読めない。不親切設計ですね！

ファンタジーな水晶玉に日本語が表示される様はなんだかおもしやのようだ。

「フレス祝福は他者の能力を引き上げ、セルフアップ自己強化は言葉通りに自分の能力を上げられます。

たしか自己強化した後に祝福を与えることで、フレス祝福の効果を底上げすることもできたはずです」

すかさず入るホワイトさんの説明、きっと過去にも同じ能力を持つた勇者がいたんだね。定番だが使い勝手は良さそうな、堅実な二つの能力。うん、定番な勇者。

「さて、じゃあ次はカナの番だね」

彼が言つて、今度は私の方に水晶が差し出された。

少し戸惑つて、恐る恐る手を乗せる。

先ほどと同じような詠唱がなされ、水晶が光る。思つたほど熱くない。ゆっくりと形作られる文字に自然と緊張がたかまつた。

「魔法 マジック 反射 カウンター、 それから……………あはは」

「……………魔法反射 マジックカウンター、 ロショウ爆弾 アブセンスベッパー、 笑えばいいと思つよ スマイルマイカ」

横から覗きこんだ彼が、絶句した私の代わりにそれを読み上げた。おい水晶ちゃんと仕事しろと思った私は悪くないはず。なにこの能力名、嫌な予感しかしない。

微妙な空気になつて黙る私たちに、無垢で純粋な痛恨の一撃がぶつけられる。

「魔法反射 マジックカウンターは魔法や魔術を反射する能力ですけど……………あとの一つは私も初めて聞きました。どういった能力なんでしょう?」

未知への興味にきらめく瞳を、私は直視できなかつた。

## 8、不審者みたいな私とメイドな彼女

地面が揺れる感覚がして同時に聞こえる爆発音に、一体勇者様は何をやつているのかと虚空を見上げた。

結局あの日、わざわざ訓練場を貸し切つてお試し能力会が行われたが、嫌な予感しかしないフラグを叩き折ることはできず名前の通りの微妙な能力を確認しただけだった。

「アセンスペッパー」  
「シヨウ爆弾……シヨウの霧を生成できるよー。ただし自分中心に。」

スマイルマイカ  
「ええいいと思うよ……ニヤニヤ笑いから大爆笑まで、人を笑わせるなら私にまかせて！ 笑わせるだけしかできないけどね！」

マジックカウンター  
「つっこみ不可。試した時のホワイトさんの笑顔、ご馳走様でした。」

マジックカウンター  
「唯一まともかと思われた魔法反射……、常時オンになってるらしいが全然わからない。つまりオフにできない。」制御できない。

ちなみに反射以外の能力の使い方は能力名を叫ぶことだった。いじめか。魔法反射を切らないと治癒呪文すら効かないとホワイトさんに言われ焦つてどうすればいいか尋ねれば、他の能力を使いまくつて制御の仕方を覚えてと言われた。いじめなのか！

横で自分の能力を試していった彼が練習に付き合うと言つてきただ正直慰めにならないよ！ むしろ逆効果ですせめて一人でやらせて！

こうして課題が一つできてしまつた私、あれから三日後の今現在は部屋で一人お留守番中です。

ちなみに片割れはどこかで戦闘訓練に参加している。ついていくかはともかく私も一緒に行こうと言つたら猛反対されました。ナイフが飛んでくるかもしれないんだよ？ 危ないよ！ ってどんな訓練なの、そう思つても結局押し切られた私。

まったく彼はときどきこびりついた油汚れみたいに頑固になるか

ら困ったものだ。ホワイトさんは喜々としてついていったのに、なんで私だけ。

心中で愚痴りながら、発動させるために能力名をぶつぶつ呟く。初めは律儀に必殺技よろしく叫んでいたのだが、少しほは慣れたのか声を張らなくても発動できるようになってきた。このまま無言で出来るところまでいきたい。はやく脱・なんか呟いてる不審者、をしたい。

能力の使いすぎによる倦怠感を感じ始め、軽くため息をついて練習をやめる。喋りすぎでのどが痛い。

スマイルマイカー  
笑えばいいと思うよ が相手ありきの能力なもの、一人の練習が苦痛に感じる一因だらう。え、「シヨウ？」この密室で「冗談を。すでに空になつた水差しを恨めしげに見やり、ベッドに大の字になる。何か飲みたいけどまだこの地理がよくわかつてない。

片割れが帰つてくるまで待つのを覚悟してのどをさすり、口を開じる。ふと、少し前から考えていたことが思い返された。

私は、ここで何をすればいいのだろうか。

「の世界に勇者として喰はれたくせに、勇者をやつてない私は、

ノックの音がした。

イッキに戻ってきた感覚に、思いの外深く考え込んでいたことこの気づく。

「どなたですか？」

「二一ノです」

聞こえた声にドアを開けると、先日勇者様付きメイドとなつたばかりの、ふわふわとした茶髪の少女が立つていた。

「喉が乾いてないかなと思つて、フランカ水を作つてきました」

につこり笑つた彼女の頭にぱたぱたと揺れる犬耳が見えた気がして、あれ自分だいぶ疲れてる？ と自問。気のせいだよ、と自答。

「ありがと」

受け取つたフランカ水すいとやらはよく冷えていて、レモン水に似た味わいを一気に飲み干す。

「生き返るー」

「大げさですよ」

照れながらも嬉しそうに返す彼女に、先ほどまでの重苦しさが少し晴れていいくのがわかる。

「向こうにいなくて平氣なの？」

「勇者様の方には姫様がついてらつしゃいますし、カナ様だつて大事な従者様ですよ。姫様もカナ様のことを気にしてらつしゃいました！」

元氣いっぱいに言い切つた彼女に、従者つて様付けするものなの？ という問い合わせが浮かんだが、別にわざわざ聞くようなことでもないかとスルー。

心なしかうずづずして いる彼女に向かって、求められてい る言葉を苦笑まじりに放つた。

「それで、勇者の戦いぶりはどうだった？」

「それはもうひさしかったんですよ！ 今日なんて騎士団長さんに勝つちゃうし、あ、私は手合わせが終わってからその場を離れたので、たぶん今は騎士の方々と一緒に訓練に参加していると思つんですけど……」

輝く瞳でマシンガントークな彼女は勇者様の大ファンです。

そんなに好きなら最後まで見ていれば良かつたのに、と言えば力ナ様のお世話も仕事ですし一人で部屋にお残しする訳にはいきません！ と返された。

おい、それは逆に見に行つてちやまづかつたんじゃないか？ え、あ！ ぐ、くれぐれも内密に！ といつ会話がその後に続いたかどうかは内密なので教えられない。

「今さら隠しても遅いと思つた……」

恵きは慌てる彼女の耳には届かなかつた。

## 9、安らげない枕とメイドな彼女について

「訓練だつたんじゃないのか？」

一日の終わり、急遽用意したというベッドではなくソファーに寝そべりながら聞いてみた。

「せひとも手合させを、とおっさんのが余計なこと言つてね」

「おっさん?」

「頭に王冠のせたおっさん

「ちよ、おま」

「おい、それはおっさん言ひちゃいけない人だろ。いくら今一人しかいなかつてお前……。」

勇者さま勇者さま、不敬罪つて知つてる?

「それで近衛の隊長さんと一対一になつたんだ。それはそつと行儀悪いよ」

「別にだれかいる訳でもないしいだろ、強かつた?」

不敬罪を気にしないのに、私の姿勢は気になるのか。たしな窘められるが、今の格好はズボンだから寝つこうがつても問題ないだろ。う。そういう問題じやないという発言は私のスルースキルの餌食にさせていただきます。

眉根を寄せて彼が答える。

「容赦なかつた。こつちはついこの間剣を持つたばかりだつてのに隊長とやら本氣で首取りに来てたよ。続く副隊長もそんな感じだつたし、本当なんなんだよ」

苛立ちまぎれに吐き捨てる彼には悪いが、剣を持ったばかりでそれについてけるのも大概だと思つ。言わないけど。

「顔に出てる」

口をつぐむ意味など無かつた。なんてことだ。

「それよつと、今日もあのメイドと一緒にいたの？」

いきなり方向転換した会話に一瞬面喰らつた。少し考え、肯定を返す。

考えるまでもなく、知り合いと呼べるようなメイドさんは一人しかいないんだけどね。とつとて何の話かわからなかつただけです。

「二ノ瀬可愛いよね」

話題の人物を思い出してそう言えど、彼のもともとあまり良くなかつた機嫌はさらに悪くなつたようだ。聞きいてきて不機嫌になるならば話を振るなど言いたい。

「…………」二ノ瀬は必死にデッヂオアアライブしてたのに……

「それって死んでるのか生きてるのかわからない表現だな」

「これはもうカナが俺に膝枕されるしかないね」

「つえあ」

「きなり妙なことを言い出され、驚いてつい変な声を出してしまつた。

お前いったいどうした、といつ視線をものともせず真顔で見返してくる彼は至極本気に見える。え、ほんとにどうしたの。

「しかも私がされる方なんだ」「だつて今寝転がつてゐるだろ」

確かにわざわざ起き上がつて膝枕してやるような殊勝さは持ち合わせていないが。

「ほらほらちよつと頭上げてー」

近づいてきた彼に腕を引かれる。素直に上体を起こすと強制膝枕を執行された、こんな安らげない枕は初めてだよ。

「固い

「俺は楽しい」

先ほどまでの不機嫌はどこに行つたのか、私の髪を手遊びながら鼻歌でも歌い出しそうな彼にこちちは楽しくないと反論、華麗にスルー、大事なことなのでもう一回言つてみると、やつぱりスルー、この人ひどい。

「そういうえば明日顔合せわざするらしいね」

思つて出したように言つて、なんだと聞き返せば旅のお仲間のことうじい。

「あのメイドから連絡きてない?」「ない」

即答し、手のひらで田をらわせ、出でしなくなつたため息を飲み込む。

——ノ……っ！

「え、ないの？」

「ないない全然ないたぶん忘れてる」

あの子メイドやってて大丈夫なんだろうか？ ちょっと本氣で心配になつてきた。

勇者様付きなんてやつてるから、あれでも一応エリートなメイドさんなんだと思っていたのだが。

そんな他愛もないやつとりで、二田田の夜は更けていく。

## 10、混せるな危険

忘れっぽいのがメイドさんは朝一でドリやかにドヤー……注意しておく。

一通り朝の雑事を終えた私たちはホワイトさんと共に、おそらく旅の仲間であるう女性一人と引き合われた。

「改めて自己紹介させていただきます。コイダーシナ国王女にして筆頭魔導師団長、フュリーラ・アハツェ・コイダーシナです。」

密室で向き合ひながら微笑むホワイトさん。そんな名前だったのね、とこりかお姫様だったんですね、何か失礼なことしてなかつただろうかとドリヤリ冷や汗かきついに数回の自分を振り返る。

もちろん顔には出しませんよ。そんな今更紹介とか、名前なんて元々知つてますよーとこり笑顔で可憐な「ようしくお願ひします」に「いえいえこちらこそ」と返す。

次に名乗り出たのは褐色の肌の美女。どうも初めて。

「私はカサン德拉。カサン德拉・ルピナス、互助団体選出のハンターよ。」

互助団体って何だらう後で一ノに聞いてみよう。一ノ今部屋の隅にメイドとして控えてるけど、こんな知つて当たり前の空気の中では聞けない。

「よろしく、凛々しい勇者と可愛い従者さん」

こうじつ笑つた顔は、けれどもホワイトさんは違つて艶を

孕んでいた。

普通に立っているだけなのに色気がにじみ出る人が実在したこと  
に驚く。

体格のせいか？ そつと彼女の豊かな胸部を見やり、自分のセセ  
やかな胸部を見た。切なくなつた。やめよう。

「キアレ・シーフル・キエーザ。ディブレーク教団所属。治癒魔術  
が得意だ、よろしく」

知的クールな黒髪の美人さんが続けて名乗る。切れ長な紺色の瞳  
がステキ、ぜひ眼鏡をかけてほしい美人さんだ。

にこりともしない、そつけない名乗りだつたが逆にそれが彼女と  
いう人を端的に表しているようだつた。

「ちらこよろしく、とお決まりの単語を返そうとしたところを  
横から割つて入る声。

「そして私つ、二ーノがお世話係として「え  
え？」

思わず零してしまつた声に、嫌な沈黙が部屋に漂つ。

「来るの？」  
「い、行きますよつ！ 私は勇者様専属のメイドなんですよーー！  
置いてくなんて酷いですつ」

言つてしまつたものは仕方ないと続けた私の言葉に、二ーノが必  
死に言い返す。確かに言われてみれば、従者である私は従者の仕事  
なんて知らないのでお世話係は必要かもしないし、この子はそん  
な役職だつた。

置いてかないで下さいいと喚く二ーノに苦笑まじりに謝る。

「『めん』『めん』、場を和ませようとしたんだけど失敗しちゃったみたい」

「謝罪に誠実さが全く感じられないのは二一ノの氣のせいですかつ？」

「そうだよ」

やりとりに、褐色美女カサンドラさんがクスクスと笑う。

「二人とも仲がいいのね」

違うのですーと声を上げ羞恥に赤くなる二一ノをホワイトさんが  
宥めた。

「置いていつたりする訳ないじゃないですか」

それでも私をジト目で見てくる二一ノの頭に、彼の手が乗せられる。

「大事な仲間を置いていく訳ないだろ」

憧れの勇者に声をかけられ、感激に涙目になりつつ変な声を上げる二一ノ。そんな二一ノを彼はさりげなくスルーし周囲を見回して、

「俺は勇者のハル、こつちは俺の従者のカナ。大変な旅になるとと思うけど、俺の手伝いをしてくれると嬉しい。これから、よろしく頼む」

そう言って頭を下げる。

ホワイトさんがほほ笑み、二一ノは先程以上にあたふたしだし、

褐色美女カサンドラさんは実は初めから色々気になっていたのか、転校生に突撃をかます同級生がごとく質問攻めを始める。

ふと、勇者を囲んで談笑する彼女たちから一步離れたところに立つ知的クール美人さんに目がとまり、先程言い損ねたことを言つてみた。

「これからよろしくお願ひします」

キアレさんは一瞬、微かに目を瞠り、うつすらとした笑みを浮かべて「こちらこそ」と返してくれた。

微笑の破壊力に戦きつつ、彼女の隣に立つてホワイトさんたちを眺める。

勇者に相応しい、可憐で、愛らしい、妖艶な彼女たち。

.....。

隣を見る。

.....。

うん、この集団に混ざつたくない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8227x/>

Wandering Trip 私と彼で行く放課後小旅行

2011年12月13日19時58分発行